

BIRD RESEARCH NEWS

2015年8月号 Vol. 12 No. 8

- 活動報告 2015年のツバメ繁殖状況調査結果
- 学会情報 日本鳥学会2015年度大会
- 活動報告 鳴き声学習ページを企画中
- 論文紹介 腹黒いチャバラカササギビタキ
- 海外情報 フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向
- 生態図鑑 アリスイ
- お知らせ ニュースレターは9月号からWEBサイトで配信します
- お知らせ バードリサーチ大会2015 in 名古屋 開催!



Photo by Toshifumi Miki

活動報告

2015年のツバメ繁殖状況調査結果

神山和夫

ツバメたちが南へ旅立ち、自宅や職場に巣があった皆さんは少し寂しい思いをされているのではないかと思います。今年、バードリサーチでは4～8月まで毎週金曜日に週刊つばめニュースというメールマガジンを発行していました。その読者の皆さんに参加していただいたツバメの繁殖についての調査結果をご報告しましょう。

ツバメの数と繁殖時期

繁殖状況についてアンケートを行なったところ、84名から回答をいただきました。ご近所のツバメの繁殖状況について、例年と比較してツバメが多いか少ないかという質問に対しては、少なかったか、もしくは同じだったという回答が多くなりました(図1)。「今年のツバメの数はどうなの?」という質問をよく受けるのですが、全国的な定量調査は難しいため、このようなアンケートで全国的な年変動を調べるこ

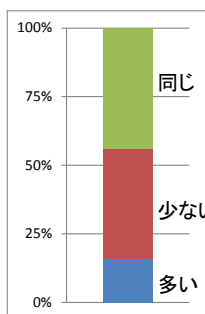


図1. 近所のツバメの数を例年と比較(n=82).

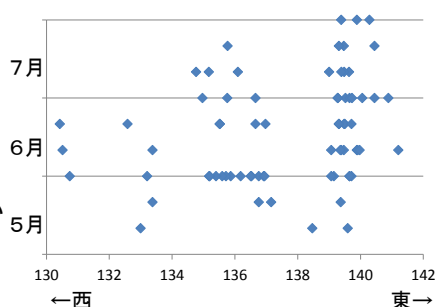


図2. 1回目の繁殖の巣立時期と経度の関係。

とができるのか、今後も検討しながら調査を続けてみたいと考えています。次に1回目の巣立時期を見たところ、西の方が早いことが分かりました(図2)。初認調査でもツバメは西から先にやって来ることが分かっていたのですが、繁殖開始も西の方が早いことが裏付けられた結果になりました。

卵数調査

ツバメの産卵時期に自宅や職場の巣を棒の先に付けた鏡でのぞき、卵がそれ以上増えなくなったときの数を記録してもらいました。卵の数は1～6卵で、大半は5卵か6卵でした(図3)。さらに卵数を時期別に見ると、繁殖時期の後半ほど減少する傾向がみられました。また、地域差についても調べてみました。産卵時期の影響を除外するために5月10日までに卵数を調査した22巣を対象に比較したところ、静岡より東では6卵が90%なのに、西では55%と少なくなる傾向がみられました。鳥類では北へ行くほど卵数が増えるという一般的傾向があり、ツバメもそれに当てはまるのかもしれませんが、しかしデータ数が少ないので、来年はもっと多くの方のご協力を得て、卵数調査を行ないたいと考えています。

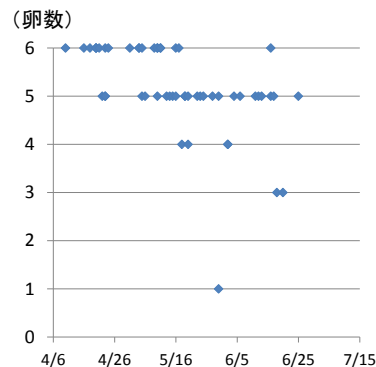


図3. 巣の調査日と卵数。

なお、卵数調査の後にも繁殖結果まで記録がある32巣のうち、ツバメが途中で巣を放棄したケースが1件だけありました。しかしこの営巣放棄はフクロウが何度も巣のそばにやってきていたことが原因と考えられるので、卵数調査の繁殖への影響は小さいと考えてよさそうですが、巣内の観察は親鳥の留守中に行い、鏡を巣にぶつけないなど、注意を払って実施する必要があります。

学会情報

日本鳥学会2015年度大会

高木憲太郎

今年の日本鳥学会大会は、9月18～21日、兵庫県立大学神戸商科キャンパスで開かれます。今回、バードリサーチのスタッフは下記の自由集会および口頭・ポスター発表を行ないます。ぜひ聞きに来てください。

日本鳥学会2015年度大会のホームページ

<http://www.stork.u-hyogo.ac.jp/osj2015/>

● 自由集会

砂浜の絶滅危惧種シロチドリ、コアジサシの現状 / 奴賀俊光

絶滅危惧種のシロチドリとコアジサシの現状について情報交換を行ない、保全上の問題点について議論します。

カワウを通じて野生生物と人との共存を考える(その18) —河川における生息地環境管理— / 加藤ななえ

魚の隠れ場所を作ることや堰の魚道をちょっとした工夫で改良するといった魚の生息環境管理によって、カワウと人との軋轢を減らしていく展望について議論します。

● 口頭発表

キビタキの羽色が伝達する情報と繁殖地における機能 ○岡久雄二・佐々木礼佳・小西広視・高木憲太郎・森本元・上田恵介

キビタキのオスの若鳥の羽色は、成鳥と部分的に異なる。この羽色の機能について、富士山青木ヶ原において研究したところ、オスの年齢によって、異性間性選択と雄間闘争に影響する羽色が異なっていることが分かった。

日本からのアメリカコアジサシ *Sternula antillarum* の初記録 ○茂田良光・藤井幹・佐藤達夫・小田谷嘉弥・奴賀俊光

2014年7月17～18日、茨城県神栖市須田浜海岸において、コアジサシの集結群を対象に夕方から翌朝にかけて霞網による捕獲を行った。コアジサシのほか、コアジサシより小さく、上面、下面とも灰色味が強く鳴き声が異なるアメリカコアジサシ2羽も捕獲された。

● ポスター発表

日本の鳥の今を明らかにする 全国鳥類繁殖分布調査 ○植田睦之・葉山政治・中山隆治

1970年代と1990年代に環境省が行なった鳥類繁殖分布調査。1990年代以降も過疎化、気候変動、震災など様々な変化が起き、鳥にも大きな変化があると考えられます。そこで2016年から3回目の調査をすることになりました。

オオルリとキビタキの初認時期の比較 ○高木憲太郎

オオルリとキビタキは同じヒタキ科に属し、その生態は比較的似ている。両種の初認時期を調査したところ、オオルリの方が少し早く渡来していることが分かった。

越冬期におけるカモ類の日本国内での性比と地理的傾向 ○神山和夫・笠原里恵

2014年と2015年の1月にカモの性比調査を行なった。ホシハジロは北ほど、そして東ほど雄の割合が高くなる傾向があり、コガモも北ほど雄の割合が高くなる傾向があった。

セグロセキレイとハクセキレイにおける順位の変化について ○平野敏明

1980年代前半、宇都宮市の田川では冬期にセグロセキレイ雄→雌→ハクセキレイ雄→雌→キセキレイ→タヒバリという順位関係があった。しかし、2013年と2014年はハクセキレイ雄とセグロセキレイ雌の順位が入れ替わっていた。

市民科学によるカササギ分布調査:30年間持続の鍵は何か? ○黒沢令子・堀本富宏・平野敏明・長谷川理

バードウォッチャーの報告記録から、移入種カササギが北海道南部に定着し、拡散する様子がとらえられた。これは市民科学による長期モニタリングの成功例であり、市民科学が成功する条件を他の事例も合わせて考察する。

まちのなかで鳥がいる場所いない場所 ○三上かつら・三上修

岩手県盛岡市の市街地において、繁殖期と非繁殖期に、それぞれどこにどんな鳥類種がいるかを調査した。繁殖期には31種が、非繁殖期には30種が確認された。鳥類種によって空間分布に違いがみられた。

オジロワシはなぜ風車に衝突するのか? ○谷口綾・島田泰夫・植田睦之

オジロワシのバードストライクの原因解明のために、監視カメラで衝突の瞬間の撮影を試みた。1例の衝突の撮影に成功し、それはオジロワシ2羽が追いかけて飛行している際に、前の個体が風車に衝突したものだ。

神戸市西区一帯におけるヒクイナの生息個体数のモニタリング2 ○渡辺美郎・平野敏明

2008年から兵庫県神戸市西区の明石川および同県明石市の農耕地の溜池で実施しているヒクイナの生息モニタリングの結果を報告する。明石川の生息数は減少傾向にあったが、農耕地の溜池では著しい変化はなかった。

越冬期におけるチュウヒの全国一斉個体数調査と長期モニタリングの試み ○多田英行・平野敏明

全国のチュウヒ研究者の協力のもと、2013年冬期から日本におけるチュウヒとハイロチュウヒの越冬期の生息数モニタリングを実施している。今回は、調査への参加を呼び掛ける目的で2年分の調査結果を発表する。

活動報告

鳴き声学習ページを企画中

どなたかお手伝いいただけませんか？

植田睦之

バードリサーチホームページの人気コンテンツ「鳴き声図鑑」。さまざまな鳥の声を聴くことができ、最近は巢内ビナの声なども公開しています。なかには巢立ち後の短期間以外は声を出さないコウノリの巢立ちビナの声など、かなりマニアックな声も。

蓄積された鳴き声図鑑のコレクションを使って、現在鳴き声の学習ページを企画しています。まずは中上級者の学習教材のテストページができました。ブナ林で鳴く鳥の声の識別練習のページです。自分で識別に挑戦した後に、ソナグラムを使った答えを見ることができます(図1)。年間を通した鳥の声がそろえてあって、総合的に学べるようになっていきます。

改善点などを見極めつつ、需要があるようならば、ほかの環境のページもつくっていきたく考えています。以下の



図1. ソナグラムを使った回答画面。

アドレスから試していただき、植田(mj-ueta@bird-research.jp)までご意見いただけるとありがたいです。

http://www.bird-research.jp/1_shiryoko/koeq/chichibu.html

また初心者向けには、鳴き声クイズのようなものを作りたいと考えています。図2のようなものを考えているのですが、それを形にする技術がぼくにはありません。ホームページづくりが得意な方、お手伝いいただけませんか？

なお、テストページの素材は、東大などが行っているCyberForestプロジェクトの埼玉県秩父演習林の録音アーカイブを利用させていただきました。ありがとうございました。

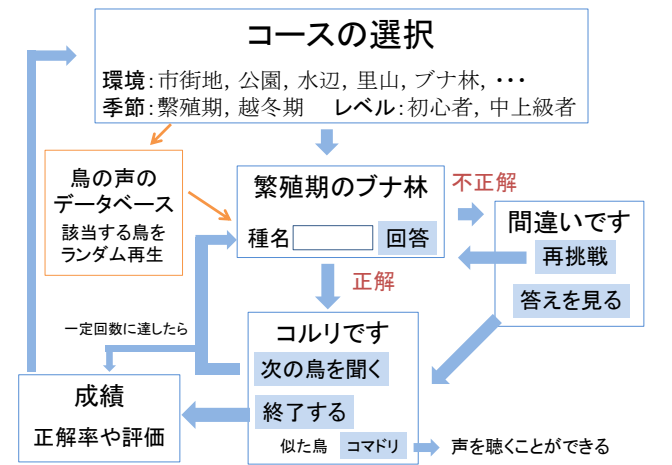


図2. 鳴き声クイズ。

論文紹介

腹黒いチャバラカササギビタキ

～小さい島々で有利な腹黒さ～

小島みずき

島での進化と聞いて、どのようなものを想像するでしょうか？島ではヤンバルクイナのように飛べなくなることもあれば、ガラパゴスフィンチのように嘴の形態が多様化することもあります。あまり知られていない島での進化の一つにメラニズム(黒化現象)というものが、これは文字通り体色(鳥の場合は羽)が黒くなる現象です。そのメラニズムについて海外で面白い論文が発表されたのでご紹介します。



写真. 左が通常のチャバラカササギビタキ、右が小さい島での黒化個体。まばらに黒と茶がまざった中間型の個体もいる。

Photo by J. Albert C. Uy

著者のウイさんとバルガス-カストロさんは、ソロモン諸島でチャバラカササギビタキのメラニズムについて調べました。名前の通りお腹が茶色く、それ以外は黒い鳥なのですが、一部の島では名前に反してお腹も黒いハラグロな個体

が見つかっていました(写真)。そこでウイさんたちは大小13の島を巡ってチャバラカササギビタキのお腹を撮影し、お腹の黒い部分の面積と黒い個体の割合を調べました。すると面白いことに、小さい島ほどハラグロ個体が多いということが分かりました。なぜ小さい島ほど黒くなるのでしょうか？調査した島々はとても近く、生息環境や気候、餌資源や捕食者などはほとんど同じであるため、環境の違いではないようです。

著者の過去の研究から、ハラグロな個体ほどより攻撃的だという事が分かっていました。チャバラカササギビタキに限らず、鳥類は鮮やかな個体ほど攻撃的なことが多く、黒い鳥ではより黒く、赤い鳥ではより赤い個体の方がオス同士の競争で優位に立ちます。そのため、「小さい島という限られた空間では繁殖のための縄張り競争がより激しく、より攻撃的な個体、つまりチャバラカササギビタキではより黒い個体が生き残った」という自然選択が働いたのだとウイさんたちは考えています。

日本でも、南西諸島や伊豆諸島などの大きさの違う島が複数あるところでは少しずつ鳥の色も違うのかもしれない。島への旅行の際にはぜひ気にしてみてください。

Uy J.A.C. & Vargas-Castro L.E. 2015. Island size predicts the frequency of melanistic birds in the color-polymorphic flycatcher *Monarcha castaneiventris* of the Solomon Islands. *Auk* 132: 787-794.

海外情報

フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向

菊地有子・守屋年史

日本を含めた東アジア-オーストラリア地域フライウェイでは、渡り性水鳥の減少が懸念されていますが、東大西洋フライウェイに含まれるフランスでは、長期間のモニタリングによって異なる事情がみえてきました。今回は、会員の菊地有子さんに翻訳していただいたフランスで越冬する沿岸性シギ類の動向についての論文をご紹介します。

フランスはシギ類の重要な越冬地

フランスを含むヨーロッパ地域沿岸では、ウェットランド・インターナショナルによって越冬するシギ類のカウント調査が実施されています。調査は毎年1月中旬、1977年から継続的に行われています。これらの調査によって、ヨーロッパでは、フランスがオランダ、イギリスに次いでシギ類の重要な越冬地であることがわかってきています。特に、オグロシギ、ソリハシセイタカシギ、ハジロコチドリ、ダイゼン、ミュビシギ、ハマシギ、コオバシギなどの主要な越冬地となっています。また、水鳥が利用するフランス国内の多くの湿地がラムサール条約の登録基準を満たしています。

ほとんどのシギ類が増加傾向

論文では、1980～2013年に行なわれた調査をもとに、沿岸性シギ類18種の動向を論じています。各種の増減傾向を明らかにするとともに、フランス沿岸部57サイトのデータを英仏海峡-北海、大西洋、地中海の3つの沿岸地域ごとにまとめ、それぞれの地域の動向を検討しています(図1)。



図1. 調査地

結果からいうと、1980年以降のフランスでは、エリマキシギ、ミヤコドリを除き、ほとんどのシギ類はかなり増加していました(図2;5ページ)。最も増加しているのはミュビシギ、アオアシシギ、ツルシギ、キョウジョシギです。またソリハシセイタカシギ、シロチドリ、コオバシギ、アカアシシギも継続的な増加傾向を示しています。2000年以降は多くの種で増加傾向が緩やかになっており、ハジロコチドリ、ダイゼン、ムラサキハマシギはほぼ増加も減少もしておらず、ミヤコドリ、ハマシギ、ヨーロッパトウネンは減少しています。一方オグロシギ、ダイシャクシギの2種については、2000年以降に激増していました。

沿岸域別では、大西洋沿岸で最も増加傾向が顕著で(図3)、オグロシギ、アオアシシギ、キョウジョシギ、コオバシギ、オオソリハシシギが特に増加していました。英仏海

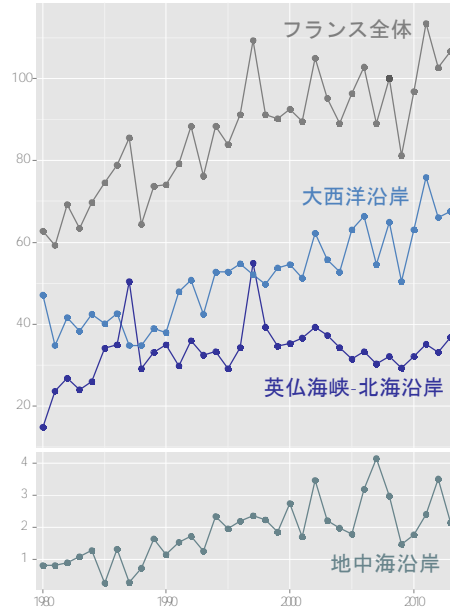


図3. 1980～2013年の地域別の増減傾向。縦軸は個体数の指標値(個体数そのものではない)。

峡-北海沿岸では、ソリハシセイタカシギとハマシギがかなり減少しており、また全体的な総数は近年横ばいとなっています。地中海沿岸は、上記2つの地域よりも個体数が少ないのですが、アカアシシギを除き、全体的に緩やかに増加していました。

大西洋沿岸にはフランスで越冬するシギ類の

66%が集中するため、この地域の動向に国内全体の動向が影響を受けているようです。

シギが住みやすくなったフランス

長期間の動向では、フランス国内はフライウェイの動向よりポジティブな状況にあります。特に、シロチドリ、ミュビシギ、ムラサキハマシギ、ツルシギ、キョウジョシギは、フライウェイ全体の増加よりも大きな増加傾向を示しています。

これらの要因として、フランス沿岸部での越冬環境の改善があげられています。1970年以降、自然保護区、海域の狩猟鳥獣保護区、ビオトープなどの保護条例等が充実し、生息地としての受け入れ能力が良好になっていると考えられます。

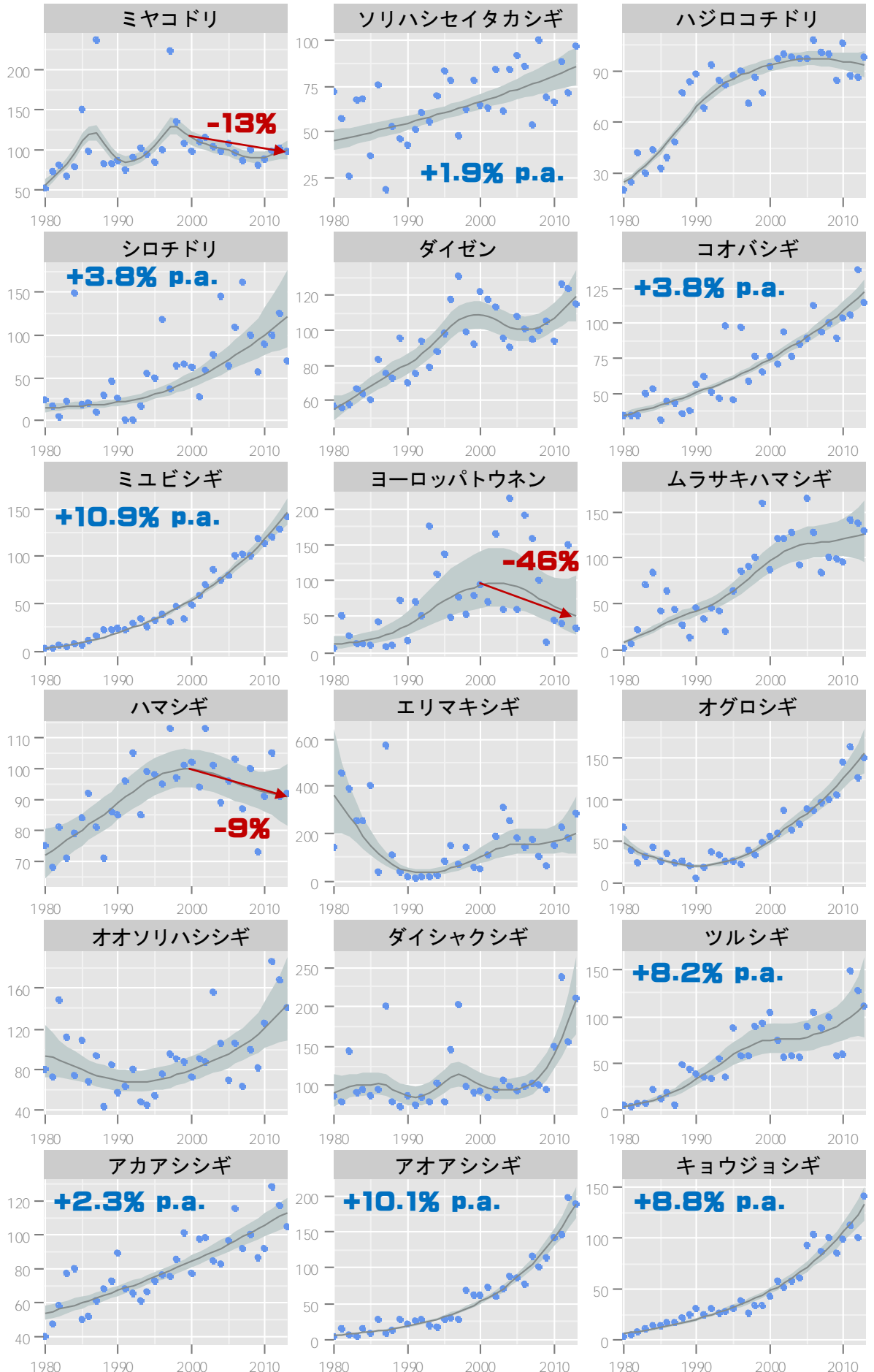
論文では、フライウェイと同様の増減傾向を示している種、特に減少している種に関しては、フランス国内だけで要因や対策を考えるのではなく、全体的な要因の探索が必要で、グローバルな繁殖地や越冬地に関する調査が必要であると述べられています。西ヨーロッパについては比較的調査研究が進んでいますが、アフリカの保護の状況はよくわかっていないため、現在そのための国際プログラムを実施中ということです。

日本もシギ・チドリ類の長期モニタリングを実施しています。日本の動向と、東アジア-オーストラリア地域のフライウェイ全体での動向を比較することで、シギ・チドリ類各種の増減の要因を知る手がかりが得られるかもしれません。特に減っている種については、国内はもとより国外の減少要因についても積極的に調査を行っていく必要があります。

Quaintenne, G., Dubois, P. J., Deceuninck, B., Mahéo R. 2015. Limicoles côtiers hivernant en France : tendances des stationnements (1980-2013). [Coastal waders wintering in France, trends 1980-2013.] Ornithos. 22 (2): 57-71.

海外情報

図 2. 1980 ~ 2013年の沿岸性シギ類の増減傾向。縦軸は個体数の指標値(個体数そのものではない)。指標値と95%信頼区間を示す。特に増加傾向が顕著なものは青字で年変化率(p.a.)を示した。また2000年以降減少しているミヤコドリ、ハマシギ、ヨーロッパトウネンについては赤字で2000年以降の減少率を示した。



アリスイ 英: Eurasian Wryneck 学: *Jynx torquilla*

1. 分類と形態

分類: キツツキ目 キツツキ科

全長: 164-183mm
 翼長: ♂77.7(74.64-79.19)mm ♀78.1(75.64-80.04)mm
 ふさぎ長: ♂21.0(19.74-21.91)mm ♀21.3(19.33-23.13)mm
 体重: ♂39.7(32.6-46)g ♀40.7(37.7-42.4)g

※全長は榎本(1941), その他は著者が2013年に大潟村で捕獲したオス16個体, メス9個体の計測値に基づく。

羽色:

頭部や雨覆は赤褐色と黒色の複雑な模様になり、白い斑点があり、風切羽は赤褐色と黒色の縞模様である。尾は灰色がかかった茶褐色に黒い横縞模様。喉から胸には黄褐色に細い黒色の縞模様、腹部にかけて矢尻模様となっている。嘴の基部から耳羽の上部, 首にかけて黒っぽい濃い茶色の過眼線が伸びる。頬下に黒い斑がある。後頭部から背にかけて太い黒い線が走る。

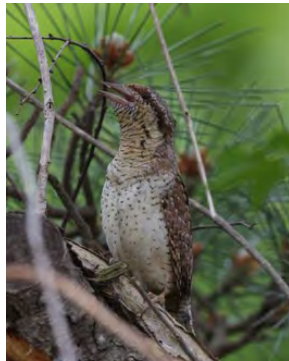


写真1. アリスイの成鳥。
Photo by 堤朗

鳴き声:

繁殖期にクイクイクイと甲高い声で鳴く。巣内雛はシャーシャーと餌乞い声を発する。巣立ち間際にはピリリという声に変化する。

2. 分布と生息環境

分布:

繁殖期はヨーロッパからアジアにかけて広く分布する。繁殖後は南下し、アフリカ大陸北部などで越冬する。

日本では北海道と青森, 秋田, 岩手など東北北部に繁殖記録がある(藤井 1990)。越冬期のアリスイは関東地方から九州地方まで観察されているが、国外への渡り状況については不明である。秋田県大潟村では、繁殖個体の約3割が帰還している。

生息環境:

木がまばらに生えた開けた環境を好む。ヨーロッパでは特に老樹のある果樹園でよく観察される(Mermod 2009)。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 ※繁殖期 ※繁殖期以外は不明

ほとんどのつがいが一夫一妻を形成するが、一夫二妻や一妻二夫も確認されている。

巣:

樹洞やキツツキの古巣, 巣箱を利用して営巣する。他の鳥が放棄した巣を使う場合, その鳥が運んだ巣材の上に産卵するが, どの鳥も使わなかった巣箱に繁殖する場合は底板の上にそのまま産卵する。スズメの巣を奪うこともある。

卵:

一腹卵数は8~13個, 体積は約 $3.7 \pm 0.4 \text{mm}^3$ 。卵殻に模様はなく, やや薄桃色がかかった白い卵である(写真2)。初卵は2卵目以降の卵に比べて非常に小さいことが多く, 繁殖巣争いなどでしばしば消失する。捕食者または他の樹洞性鳥類により一部の卵が消失した場合でも, 産卵期であれば産み足す。採卵実験の結果, 最大で62卵を産卵した記録がある(Alderson 1897)。



写真2. 卵。写真はスズメが放棄した巣箱に産卵したもので, 巣材はスズメが運んだもの。

抱卵・育雛期間:

卵は一腹卵をすべて産み終えてから約10日後に孵化する。雌雄ともに抱卵斑が現れ, 交代で抱卵する。育雛期間は約22日で, 育雛も雄雌両方で行なう。巣立ち率は約70%以上だが, まれに半数しか生き残れない場合や全雛死亡することもある。

4. 食性と採食行動

和名の通り, アリを主に採餌する。舌はアリを捕食することに特化しており, 地上のアリの巣に長い舌を直接入れてアリを絡め捕る。ヒナへの給餌には卵や蛹を与える。蛾や蜘蛛, コガネムシのような甲虫類も採餌する(清棲 1965)。またカタツムリを給餌している様子も観察され, 巣立ち後の巣内にはカタツムリの殻が多く残る。ロシアの個体群ではバツタ, アブラムシ, カブトムシ, ガガンボ, カゲロウなども食べると報告されている(Cramp 1985)。

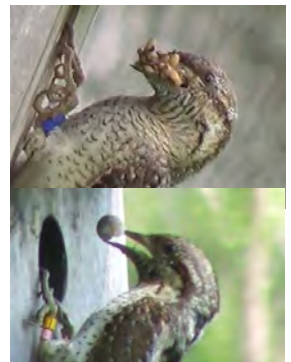


写真3. 口いっぱいのアリの繭を運ぶ親鳥(上), カタツムリを運んできた親鳥(下)

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● キツツキの異端児

アリスイはキツツキ科の鳥類であるものの, いくつか一般的なキツツキ類とは異なる生態をもつ。ひとつは, 多くのキツツキ類でなわばり宣言や求愛に用いられるドラミングをしない。繁殖期のアリスイは頻りにクイクイクイと鳴き, これがドラミングと同様の役割をもつと考えられる。また, 自身で新たに巣穴を掘ることはない。ただし既にある樹洞を拡張することはある。樹上での行動も特徴的である。キツツキ類は木の幹に縦にとまることが多いが, アリスイは一般の鳥類と同様に横枝に止まることが多い。これは枝に止まって, 地面のアリを探すためだと考えられている。一方, 舌が頭蓋骨を一周した構造をとることや対趾足であることなど, 体の構造形態は他のキツツキ類と共通している。

アリスイ属はキツツキ科の中でも初期に系統が分かれていることが分かっており, 穴掘り行動を獲得する前に分岐したのかもしれない。そして生体数が非常に多いアリを主要

な餌資源として利用することに特化し、特徴的な行動が進化してきたのではないかと考えている。

● 巣の防衛

親鳥が巣内にいる時に他個体が巣箱内をのぞくと、親鳥はシューッという声を出して侵入者を威嚇する。シジュウカラでも同様の行動が見られ、その音はヘビの声と似ている(Krams *et al.* 2014)。様々な生物にとって脅威であるヘビの声を真似ることによって、侵入者を退けていると考えられる。

● 首ふり行動

アリスイは首をクネクネとねじる奇妙な行動をとることが知られている(写真4)。巣内雛も孵化16日目以降には首ふりを行なう。この行動はヘビの擬態であるともいわれ、捕食者に対する防衛行動だと考えられている。著者らは捕食者に対する行動であることを確かめるために、カラスやイタチの剥製を巣箱の近くに提示してみた。その結果、アリスイは剥製に対し警戒声を発したり、スズメやコムクドリなどとモビングをしたが、首ふり行動は観察されなかった。少なくとも巣の近くに捕食者がいるだけでは首ふり行動をしないことが分かった。



写真4. 首をねじっているアリスイ。

しかし、これだけでは首ふり行動が対捕食者行動ではないとは言い切れない。著者らはハンドリング中と、アリスイがかすみ網にかかっているときに捕獲者が近づいた状況で首ふり行動を確認している。より差し迫った状況、例えば捕食者に捕まって身動きできない時などに首ふりを行なうのかもしれない。首ふり行動が発生する状況およびその行動の機能と効果については今後の解明が待たれる。

● ヨーロッパでの個体数減少の状況

アリスイの個体数は、19世紀の中頃から現在までヨーロッパの広範囲で減少傾向にある。イギリスでは、1800年代までは南部を中心に普通種として生息していたが、1990年代後半には一部の地域を除いてほぼ姿を消している(Monk 1963)。南フランス、ベルギー、オランダ、ドイツでも1960年代には姿を消している。フィンランドとスウェーデンでは20世紀終わりまでに50%以上減少した。

ヨーロッパ全土	382,000
ロシア	158,000
スペイン	45,000
スウェーデン	5,000~10,000
フィンランド	4,000

表. ヨーロッパのアリスイの個体数調査結果(数字はペア数)。del Hoyo (2002)をもとに作成。

個体数が減少している原因の一つは、生息環境の改変であると考えられる。1950年代からは果樹園、未開発の牧草地などのアリスイの採餌場所が減少し、一部は針葉樹(アリスイの巣場所が形成されにくい硬材)への転換が進んでいる。また、都市開発および農耕地の増加によって繁殖と採餌のためにアリスイが利用する樹木が伐採されている。さらに、これらの土地改変は地上性のアリの繁殖を攪乱し、餌資源としてのアリ個体数が減少しているとの指摘もある。

長期的に見れば同様の環境改変が日本でも起こっているはずであるが、国内の繁殖個体数および個体数変化については情報が少なく、その実態は不明である。日本におけるアリスイの現状を把握するため、個体数調査を行なう必要がある。

6. 引用・参考文献

- Cramp, S. (ed) 1985. Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa. The Birds of the Western Palearctic. Vol IV. Oxford University Press, Oxford.
- del Hoyo, J. A. Elliott & Sargatal, J. 2002. Handbook of the birds of the world. vol.7. Lynx Edicions, Barcelona.
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- Krams, I., Vrublevska, J., Koosa, K., Krama, T., Mierauskas, P., Rantala, M.J. & Tilgar, V. 2014. Hissing calls improve survival in incubating female great tits (*Parus major*). *acta ethologica* 17: 83-88.
- Monk, J.F. 1963. The past and present status of the Wryneck in the British Isles. *Bird Study* 10: 112-132.
- Mermod, M., Reichlin, T. S., Arlettaz, R., Schaub, M. 2009. The importance of ant-rich habitats for the persistence of the Wryneck *Jynx torquilla* on farmland. *IBIS* 151: 731-742.
- 佐藤公生・西出隆・菊地直基. 1996. 秋田県八郎潟干拓地におけるアリスイの繁殖記録. *Strix* 14: 135-141.
- 清棲幸保. 1965. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- 藤井忠志. 1990. 岩手県岩泉町堰取におけるアリスイの営巣記録. *Strix* 9: 63-70.

執筆者

橋間清香

秋田大学 工学資源学研究所 技術職員

加藤貴大

総合研究大学院大学 先導科学研究科
5年一貫制博士課程4年

2013年から秋田県大潟村で巣箱に営巣する鳥類の繁殖生態を研究中。立教大学大学院で2年間アリスイの研究に取り組んだ。大潟村に来るまでアリスイの姿を見たことがなかったのだが、あっという間にアリスイの虜になり秋田



写真5. 2013年大潟村にて。加藤(左から2番目)、橋間(左から3番目)。

で就職することに。現在もアリスイの繁殖を見守る。(橋間)スズメの孵化率が気になり、地元の秋田県で調査を開始。巣箱をつけてみたらアリスイやコムクドリもたくさん繁殖したので、まとめて調査中。(加藤)

お知らせ

ニュースレターは 9月号からWEBサイトで配信します

神山和夫

バードリサーチのニュースレターは、創刊以来PDFファイルで発行してきました。しかし最近ではWEBニュースやWEBマガジンといったスタイルが一般的になり、また昨年11月に実施したニュースレターのWEB化に関するアンケートでは、80%以上の回答者にWEB化にご賛同いただきました。そうしたニーズに合わせ、新しくバードリサーチのニュースサイトを立ち上げることになりました。6～8月号のニュースレターはPDFとニュースサイトの両方でご提供していますが、PDFによる配信は今月号で終了となり、今後はWEBでニュースをご提供していきます。

一般公開は9月の予定ですが、すでに右記URLからアクセスしていただけます。パソコンだけでなくスマートフォンやタブレットに対応しているため、いつでもどこからでもニュースレターをお読みいただけます。

記事の冒頭部分までが一般公開されており、有料会員の

方はバードリサーチIDでログインすることで全文がお読みいただけます。また一部の記事は一般向けに全文公開されます。

会員の皆様には、これまで同様にニュースレターの概要版テキストを電子メールでお届けいたします。これからもご愛読ください。



バードリサーチニュースWEBサイト

<https://db3.bird-research.jp/news>

お知らせ

バードリサーチ大会2015 in 名古屋 開催！

高木憲太郎

バードリサーチでは、会員の集いとして毎年研究集会を開いていますが、もっと大きな集まりにしていけたらという思いを込めて、今年はバードリサーチ研究集会あらためバードリサーチ大会を開催します！開催地は名古屋。バードリサーチからの活動報告のほか、今年は大阪市立大学の高木昌興先生に島における鳥類の生態とその研究の魅力について基調講演をお願いしています。アカコッコやリュウキュウコノハズクなど、高木先生が調査してこられたさまざまな鳥を題材にお話ししていただきます。また、会員の皆さんからの口頭発表とポスター発表も募集します。ご自身の調査結果を発表して下さる方は、大会参加申し込みの際に、送信フォームに発表タイトルなどの必要事項をご記入ください。発表されない方は当日参加もできますが、おおよその人数を把握するため事前申し込みにご協力いただくと助かります。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時:

大会 2015年11月21日(土) 11:00 ~ 17:00

懇親会 同日 18:00~20:00

会場:

名古屋学院大学日比野学舎 501教室, 601教室

〒456-0062 名古屋市熱田区大宝3-1-17

日比野駅徒歩0分

プログラム:

11:00~12:00 基調講演: 高木昌興准教授(大阪市立大)

「島々における鳥の生態研究の魅力」

12:00~13:00 昼休み

13:00~15:00 ポスター発表(発表者募集中)

15:00~16:30 口頭発表(発表者募集中)

16:30~17:00 バードリサーチの活動報告

18:00~20:00 懇親会

昼食について:

事務局で準備はいたしません。教室で買ってきたものを食べることはできますが、ゴミ等は各自持ち帰っていただくようお願いいたします。会場周辺には、いくつか飲食ができるお店もございます。

研究集会の詳細、参加申し込みはこちらをご覧ください。

http://www.bird-research.jp/1_event/nagoyataikai2015/index.html

バードリサーチニュース 2015年8月号 Vol.12 No.8

2015年8月31日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9

TEL & FAX 042-401-8661

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: クロツグミ